

エッセイ、回顧録

アラビスト外交官の39年 第7回

塩尻 宏（中東調査会参与、元駐リビア日本国大使）

本文はアラビア語専門の外務省員として39年を過ごした著者の波乱にみちた経験を回顧したものであり、2012年8月28日から2013年10月1日まで29回にわたって「ASAHI 中東マガジン」に掲載された回顧録を、そのまま転載したものである。最初の記載からすでに9年間が経過しているが、日本と世界を取り巻く外交関係が混迷を極めている現在、外交の舞台で活躍を目指す若者や、最近の国際関係について学びたいと考える人々にとって、何らかのヒントになれば幸いである。

第7回 三木ミッション：石油外交の現場で

《東京：日本が友好国に》

第1次石油危機の最中、田中角栄総理の特使として1973年12月10日から28日まで中東諸国を訪問した三木武夫副総理兼環境庁長官にアラビア語通訳として同行した私は、ザード大統領（アラブ首長国連邦）、ファイサル国王（サウジアラビア）、ジャーベル皇太子（クウェート）、ハリーフア首長（カタール）、バクル大統領（イラク）との首脳会談に立ち会いました。三木特使もその会談相手のいずれもが既に逝去されていますが、嵐の如き当時の日々は時おり走馬灯の如く懐かしく思い出されます。40年近くも経つと、それぞれの会談内容はもはや断片的にしか思い出せませんが、真摯な態度で熱心に話された三木特使に対して、いずれの国王や大統領、首長も極めて好意的な対応であったことを印象深く覚えています。

結果的には、三木特使一行がまだ中東諸国を訪問中の12月25日にOAPECが日本を友好国とするとの決定を発表しました。丁度イラン訪問を終えて最後の訪問国イラクに向けて飛行中の特別機の中で、目頭を熱くした三木特使がそのことを機内の同行記者団に発表された際の興奮振りは今でも覚えています。日本が友好国扱いとなった経緯については、当時の関係者がそれぞれの立場で解説されているようですが、私の印象では2番目の訪問国サウジアラビアでの三木特使とファイサル国王との会談が決定的な影響を持つものであったと思っています。

三木特使とファイサル国王との会談は 1973 年 12 月 12 日午前に行われました。先方の指示で日本側の同席者は駐サウジアラビア日本大使と通訳 2 名(重要な会談とすることで、それぞれが日本語→アラビア語とアラビア語→日本語を分担)に限定されました。向こうが霞むほどに大きな謁見の間に入ると、先方の同席者は左右の壁に沿ったソファーに座っていました。正面にもソファーが並んでいましたが、そこにはファイサル国王のみが中央に居て三木特使を迎え、隣に座るよう促しました。私と片倉邦雄氏が国王と三木特使の向かい側に用意された椅子に座って通訳しました。片倉氏は、昭和 35(1960)年に入省した初代の上級職アラビストで、当時、経済局で国際石油情勢を担当する国際資源室の首席事務官でした。アラビア語通訳として三木特使に同行したのは私一人でしたが、数多くの会談が予想されていたので、片倉氏が本来業務の役割と同時に必要に応じて通訳支援を行うために同行していました。

ファイサル国王は、1971 年 5 月に国賓として訪日した際に日本の厚遇ぶりと共に日本の発展ぶりとそれを成し遂げた日本人について極めて好印象を得たと伝えられていました。会談は友好的な雰囲気始まり、三木特使は、日本の実情とパレスチナ問題に対する日本の立場について熱心に説明した上で、日本が OAPEC の石油戦略に基づく友好国扱いとなるよう配慮願いたい旨要請しました。会談の途中、国王がサウジ側の同席者に「日本が友好国扱いでないのは本当か？」と尋ねたのが、通訳として同席していた私の耳に残っています。その後、国王から三木特使に対して「日本が困ることにならないよう最善を尽くすので、ご心配ないように。」との発言があったと記憶しています。

ファイサル・三木会談の直後に、サウジアラビア王族の一人がプライベート・ジェットでエジプトに飛んで、サダト大統領に国王からのメッセージが伝えられたと聞きました。その後、関係諸国への根回しなどが行われた結果、1 週間後の 12 月 25 日に開催さ



れた OAPEC 石油相会議で、前述のように「日本を友好国と認める」決定が行われました。

《東京:ドキュメンタリー『狼がやってきた日』》

第 1 次石油危機と日本の対応については、柳田邦男著『狼がやってきた日』(1979 年、文藝春秋社)に明快な筆致で当時の実情が克明に記述されています。著名なノンフィクション作家の話題作として覚えている方もおられると思います。柳田氏の上記著作は、世界的な石油危機に巻き込まれた当時の日本の様子を具体的に記録したもので、その著作を読み返すと、あの慌しい日々の思い出が蘇ってきます。

ノンフィクションとは、「虚構をまじえず、事実を伝えようとする作品」(『広辞苑』)とされています。柳田氏の優れた著作の全体的な価値を損なうとは思いませんが、当時その現場の片隅にいた私としては、その内容の一部に取材不十分などところがあることも指摘しておきたいと思います。

例えば、柳田氏の上記著作の 185 ページには三木特使のアラブ諸国訪問について以下のような記述があります。

外務省側からは、外務政務次官山田久就、外務審議官東郷文彦、中近東アフリカ局参事官中村輝彦、アラビストの片倉邦雄と塩谷和が随員として同行することになった。

確かに外務省のアラビストに塩谷和(しおたに・かのう)という先輩がいましたが、アラビストとして三木特使に同行して通訳を務めたのは私と片倉氏でした。同氏は、前述のとおり、通訳が2人必要となったファイサル国王との会談の他、エジプトのサダト大統領やシリアのアサド大統領との会談の通訳を担当しました。柳田氏の上記著書が出版された 1979 年には、私は在ヨルダン日本大使館に在勤していました。同書の中で私のことが別人の塩谷氏になっていることを 1981 年春に東京に戻ってからはじめて知りました。柳田氏にとっては似たような名前で大した違いはないかもしれませんが、当の本人にとってはあの著作を見るたびに、自分が別人に置き換えられていることが気になります。その塩谷氏も先頃(2012.7.22)鬼籍に入られたとの報に接し、令夫人にお悔やみ状を差し上げました。寂しく思うと同時に歳月の流れを感じます。

また、『狼がやってきた日』の 59 ページには以下の記述があります。

外務省が外交官試験の中で、アラビア語を専攻するアラビストを採用するようになったのは、昭和三十四年に遡る。

私が昭和 42(1967)年に外務省に入省した時に、先輩職員から「君は外務省で 29 番目のアラビストです」と言われたことは前にも書きましたが、日本の外務省がアラビ

アラビア語留学生を採用し始めたのは大正 15(1926)年です。上級職のアラビア語研修が始まったのは柳田氏の著書にあるとおり昭和 34(1959)年(注:入省は昭和 35 年)ですが、外務省が最初のアラビア語専門家を採用したのは、それよりも 33 年前のことでした。

さらに、同書の 58 ページには次のような記述もあります。

石油危機の最中に、外務省はマスコミから「アラブ外交をまるで軽視してきた」「アラビア語のできる外交官は数えるほどしかない」などと、さんざんに悪口をたたかれたが、こうした非難は半分当たってはいたが、半分は、断を下すのに性急過ぎるマスコミの弊が現われたものであった。

また、331 ページの「あとがき」には次のような記述もあります。

あのとき、マスコミは、「アラビア語も話せない」と外務省を批判し、「油買いに狂奔」と商社を噛み、「出荷調整でパニック演出」と企業を攻撃した。

しかし、「アラビア語も話せない外務省」と言うのは事実ではありません。前にも書きましたとおり、二階堂官房長官談話はアラビア語に翻訳してアラブ諸国に通報されましたし、三木特使が訪問したアラブ諸国での首脳会談は全て私を含めた日本外務省のアラビストが通訳に当たり、特使が携行したアラブ首脳あての田中総理親書にはアラビア語訳文が添えられていました。また、7 通のアラブ首脳あて総理親書は、三木特使一行の東京出発前に、私が先輩アラビストと一緒にアラビア語に翻訳して、それを私が中近東課にあったアラビア語タイプライターで浄書しました。今ではパソコン画面に打ち出して確認し、印刷ボタンをクリックすれば完成ですが、当時のタイプライターはマニュアルでしたので、1 カ所でも間違えると最初から打ち直しでした。重要文書でしたので打ち間違いが許されないのはもちろん、それなりに体裁も整った形で浄書するのに、慣れない昔風のタイプライターと格闘したことを思い出します。

斯く言う日本のマスコミはどうかと言えば、当時からエジプトのカイロには日本の主要新聞社や NHK の特派員が駐在していましたが、だれ一人としてアラビア語で取材できる人はいなかったと記憶しています。彼らは、AFP、UP、ロイターなどの欧米通信社からの英文配信記事を頼りにカタコトの英語を話すエジプト人の助手を使って仕事をしていたのが実情です。

一方、当時から在エジプト日本国大使館では、アラビスト館員が日常的に現地の主要アラビア語新聞に目を通し、論調などを翻訳して東京に報告しており、私もその一部を担当していました。そのような報告を東京の外務省幹部がどれほど注目していたかは分かりませんが、日本大使館では現地のテレビやラジオのアラビア語ニュースと共に定時の BBC アラビア語ニュースをもモニターしていました。また、サダト大統領のア

ラビア語演説などはテレビやラジオを通じて聞くか、時には会場に出かけて直接聞いて報告を作成したりもしていました。

確かに、国際情勢についての主な関心が欧米やアジアの動向に向けられていた当時の外務省が、アラブ外交をさほど重要視していなかったとのマスコミの指摘は、柳田氏の言うとおりで、半分は当たっていたと思いますが、当時、現場の片隅で走り回った者として、「アラビア語も話せない外務省」と言われると、心穏やかでないものを感じました。

第 4 次中東戦争とその後の石油危機を経験した日本は、好むと好まざるにかかわらず、アラブ世界との関係にも相応の注意を払わざるを得ない状況になりました。世界全体を相手にする日本外交の中で中東・アラブ世界の位置付けは、私の目からすれば日本の国益にとっての重要性に比して未だ不十分との思いがしますが、外務省は、1960 年代以降は毎年 2～3 名、1970 年代に入ると毎年 4～5 名のアラビストを採用しており、平成 24 年 4 月現在、外務省の現役アラビストは約 150 名となっています。(続く)